

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	初夏：創作
Author(s)	東，明雅
Citation	龍南， 2 3 1： 5 - 1 9
Issue date	1935-06-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7251
Right	

初夏

東 明 雅

——この拙なき一篇を丁・秋岡兄に捧ぐ——

ゼエ、ゼエ、ゼエ、松林で鳴いてゐる毛虫の聲さへ暑く睡氣を催す午後の授業から解放されて放心した様に階段を下つて居た美作^{みまさか}は後から誰かと呼んだ様な氣がしてひよいと振りむくとそこには晴々した春野の顔が追つてゐた。

「おい。お前今夜暇だらうな」

「暇さ。どこにか連れて行くのかさ」

「いゝ所に連れて行くから是非来い。今夜六時頃誘ひに行くよ」

「うん、一体どこに行くのか。活動？漫才見に？」

「いや、とに角だまつてついて来ればいゝさ」

「お前は信用にならんからな、どこだい？」

「来るんだな、それぢや云はう、實はネ俺と同じ村からこゝに出てゐる人の家だが。そのメツチエンがネ。馬鹿！俺とは何でもないんだ。それが今度A女學校を出たんで元のクラスの極く仲のよい人だけ集めて懇親會みたいなものをするんだ、それに俺が招待されて『お友達をつれて来て下さい』とたのまれたからお前を連れて行かうと思つたのだ。松原町に宗像で大きい邸があるだらう」

「エ、宗像？」だまつて聞いてゐた美作が急に驚の語を出したので春野も一寸立ち止つて凝視した。

「知つてゐるのか、お前？」

「いや、知らなう」

「何んだ、ぢやいゝね、六時頃来るよ。何、行かない。そんな事が出来るか。實はその彼女がお前を待つてゐるんだとサ。アハハ。きつと待つてろよ。待つてないと之だぞ」

と拳骨をかためて見せながら笑つて失敬と走り去つた。美作は階段を下りて外へ出るともう夏らしい青空からふりそくぐ太陽がガラスや砂に反射してギラ／＼と眩かつた。

白く咲いてゐるからたちの垣根に沿ひながら興奮しつゝ一人歩いた。

宗像定子―春野の言が間違ひないなら確に彼女だ。美作は彼女の姿を網膜に浮べて見る。

かわいゝびつたり身に合つた紺のセーラー服。ほんのり紅の差した白い頬。美しい臍。形がよすぎて一寸險に見える鼻それは三年前の定子さんの姿だつた。

美作がその頃近所にゐた定子さんをはつきり意識出したのは彼がまだ中學の四年か五年大人氣ないランドセル等を背中に負つたまだ他愛もない時からだつた。しかし意識したとは云つても元々勇氣のない彼だつたので實行に移す事はとても出来なかつた。たゞ定子さん所の前を散歩して定子さんの聲を聞いたり又は定子さんが通に出てゐるのを見たりしてよろこんでゐたにすぎなかつた。しかしその頃から美しい定子さんには美作と同じ中學にさへ數多くの崇拜者をもつてゐたので誰それが宗像さん手紙を出したとか貰つたとかクラスのうちで噂のある度に淋しい思をしたけれどもそれと言つて心の中を打ちあける事は愚か今に至るまでもまだ一言葉も交した事がないのだつた。しかしその頃は夢中だつた……。

しかし打ち明けない事は神も知らぬ道理で定子さんの方からは何とも思つては居まい。

次の様な涙ぐましい？ モソソド 挿話さへもある。あたかも今頃のやうな初夏の夕で定子さんも夕涼みに表に出てゐた。彼は

何かで定子さんに存在を認めて貰はうと思つてゐたのだ早速新しく買つてもらつてゐた自轉車を引っぱり出した。片手離し、兩手離、縦横無盡に定子さんの前を颯爽たる自己の姿を想像しながらあやつつてゐた。しかし自轉車は主人の心も知らずあまりの虐待に憤慨したと見えて晴の場所定子さんの面前で殘酷にも振りおとした。アツと思つた瞬間美作のブライドは天空遠くも飛び走り苦々しい悔恨と恥しさがそれこそ穴の中へでも入りたい程だつた。

定子さんは内でどんなに笑つたらうとそれからこの事が氣おくれになつて彼の定子さんに對する感情を一層慘めなものとしたこの恥しい思出が消ゆる前に定子さんは今の松原町へ引き越したのだ。その時以來三四邊道で會つた事があるその時はもう美作も一段上の學校に入學してゐた。

しかし心の中で思つてゐる事は前の通りであの自轉車が今だにたゞりをなして又そればかりでなく今となると家庭的の事情なども參酌されて中學時代の一本氣はなくなつたんだん／＼年を取つて來たと自分でも思はれる。そんな具合だかり道で會つても禮も交さず行きすぎるのが常だつたがやはり日に日に美しくなつて行く彼女に會ふとその日中彼女の幻影に悩んだ。今日春野が云つた事は青天の霹靂だつた。そして一方に春野に對する嫉妬が起きると共に今更彼女の家を訪れる事が面映く思はれて輕卒に約束した事が後悔された。

「行くか行かぬか之が疑問ぢや」とハムレット張りの言葉を吐きながら決心がつきかねてゐるうちにもう家の邊まで來てゐた。生垣越に見ると庭では父が例によつて例の如く菊苑の手入をしてゐた。浴衣の尻をはしよつて一心に虫の驅除をしてゐた老人は一人息子の靴音を本能的にいち早く聞き知つてにつこりふりかへつた。

「おう、勇、早くカパンを置いて加勢して呉れ」

五十を越して妻に先立たれ恩給で暮してゐる老人の楽しみは菊と息子の二つだつた。そして息子に手傳つてもらつて菊の手入をする時が最も幸福な時だつたので一人で十分出来る位の鉢しかないのによく一人息子を引つぱり出しては加勢させやうとした。息子も老人の心をよく知つてゐたからいつもなら直にとび出して鉢の水洗、芽の缺定、肥料の世話など一人でやつて父をよろこばせるのだつたが今日は焦々して氣が進まなかつた。

書齋に入つてカパンを投り出して机の上の鏡を見ると美作の顔が能の面か何かの様に硬ばつたまゝ押しつけた様に映つてゐる。汗が一ぱい出たまゝの顔がテラ／＼光つて自分ながら醜く思はれた。窓をもれる若葉の縁の光線の爲だらうか。この世のものとも思はれぬ程蒼ざめて見える。永い間洗はなかつた髪はバラ／＼に亂れて雲脂までが白くボツボツ見えた。彼は凜々しい春野の姿を見ひうかべる。

男性的な秀でた眉目、もし春野がライバルになつたらそれはむしろ壓倒的だつた。美作は云ひしれぬ不安の中に佇んで、定子さんの目に映つる彼と春野の姿を思ひうかべて見た。男らしいそして鷹揚な金持の坊つちやんの姿と比し貧しい退職官吏の息子が歡心を得やうと自轉車をのりまはして墜落した圖は一種のカリカチュアでしかなかつた。特に春野は自由に出入りの出来る身分である。春野の方から求めないでも定子さんの方から求めるかも知れない。そんな事がないと誰が斷言し得やう。しかしそうなつてゐるとすれば……と思ふと矢も楯もたまらず手拭と石鹼をにぎつてかけ出して浴槽にドンブリ身をつけて始めて落ちついた氣になつた。

午下りの廣々したタイル張りの錢湯は外には誰一人も入つてゐなかつた。水が溢れてサツと流れるのが爽快な氣をよびおこした。青葉ごしの縁の光が天井のガラスのすき間からさしこんで水の上でゆら／＼とゆれてゐる。番臺の所邊で時々ねむそうに煙草盆をたゞく音の外何の音もきこえなかつた。燕が窓をかすめてすいと身を翻へして飛ぶ。洗場につて窓を明け放すと薫風が肌に氣持ちがよく手拭でござしこすると蒼白かつた顔にさつと血の氣が上つて來た。こす

りながらだん／＼気分が回復して、もしかすると定子さんは彼を覚えて居てわざ／＼春野に呼ばせたのかも知れぬと思つた。すると先刻春野が言つた冗談さへ本當かも知れないなど考へる様になつて來た。

ついこの間の日曜の夜だつた。美作が春野の下宿で遊んでゐた時この地に出てまだ二三年にしかならぬ春野はこの地育ちの美作よりメツチエンに就ては詳しかつた。何かの序に

「この年になつてリーベ一人も持たぬ奴はきつとどうかしてゐるんだ」と豪語した春野の姿が印象的だつた。

「しかし、そりやそうとは限らんよ、中にはまだ相手の見つからない者もあるだらうし又よし思つてゐる人が居ても勇氣がなくプロポーズできない者も居るだらうからネ」と定子さんの外リーベと名のつく／＼者をもたぬ美作が躍氣となつて辯明した。

「それはその勇氣のないのがどうかしてゐるんだ。お前もその中の一人だらうつまらんぞ」と云つてワハハハと笑つた。癪にさわつたけれども本當の事なので怒るわけにも行かなかつた。しかしその時は春野がどんなリーベをもつて居るか問ひもしなかつたし又彼も話をしなかつた。もしや春野のリーベが定子さんではないだらうか？そう云へば彼はついで定子さんの話をした事がなかつた。その日以後美作も彼自身の不甲斐なさにあきたらなくなつて來てまた春野の言に刺戟されたわけでもなかつたけれども若き日の思出にかうした事の一つさへないと云ふ事がものさびしいものに思はれてあらゆる家庭的事情を無視してゐる若い元氣を出して定子さんに打ちあけて見やうかと思つてゐた所だつた。

あまり永く考へながらすつてゐたので到頭噓が出た。身体をふいて上ると大鏡にうつつた彼の姿に見入つた。先刻鏡を見た時よりも血の氣が上つて元氣そうに見える。これで一安心して兎に角今日の事は成行きのまゝに任せやうと云ふ決心が浮んだ。もしかすると先刻考へた様に定子さんが彼を呼ぶために會を催すのかも知れない。美作はうれしい空想を懷いて元氣が出てお湯から歸ると父はまだ簀の子の被をした三十鉢位の菊を前にしてその芽を摘んだり肥料をかけた

りしてゐる。美作は父の小さい体が肥料の中を忙しく行き來しその繊細なすじばつた手が赤い手鐲を握つて機敏に動くのを眺めてゐた。三十年近くの官途生活で痛めつけられた頭には白い髪が僅に残つて地が透して見える。後向きになつた首すじが細つそりとして白いのがうらさびしかつた。この頭も三十年上役に壓へつけられ通しで小役人生活の窮屈さをしみじ味はつたのだらう。そして一年餘前その職からも追はれ妻を失つて仕方なく菊に仕事を見出してゐる。元々父はあまり草花などは好きではなかつたが今ではもうその事以外樂は有りえないのだ。碁か將棋が好きならまぎれも出來やう。そしてつと教養がないなら何かにだまされ熱中も出来る。しかし生中にインテリの父はそれも出来ない。釣も嫌犬も好かぬので朝新聞をよんでしまふと三十年の情勢で仕事がないと落つかず暇をつぶすのに苦勞したその姿を見ると美作はいつその事父が酒が好きか又は藝者買ひでもしてくれたらとまで思ふ事があつた。そして今淋しく菊を扱つてゐる老人の後姿に人生の長い旅路にいためつけられて來た人の痛々しい姿を見出し何とかしてこの人が夢中になる程よろこばせて見たかつた。

「お父さん、何かしませうか」

「うん、うん、何もうぢきすむんだからいゝよ。」とこぼるゝ程の笑で顔中をしわだらけにして老人はふりむいた。

「肥料を運びませうか」と自分から重い桶を擔つて運びながら父の成人した子供に對する喜を見ると自分も嬉しくなつて益々元氣にむしる亂暴な程活動した。父はよるこんで居る。そして父をよるこばしてゐる自分の姿にも深い満足を覺えたと共に美作の心の中は一つ彼に満足を與へるものがあつた。「メツチエンがお前を待つてゐるぞ」と言つた春野の言葉がたとく冗談でも何かしら根據があるやうにしか思はれなかつたのだつた。

美作と春野は宗像家の離れの定子さんの室に二人ともパットを烟らせ乍ら照れ臭さうに座つてゐた。

定子さんとお友達はお茶や菓子を用意に主家の方に行つて、はしやいでゐるのがきこえてくる。茶室風に作つたこの離れは柱一本天井板一枚にも數奇をこらしてある。その滋味とコントラストをなして眞新しい疊の上には定子さんの凝つた机が窓近くに置いてあつて新刊書が二三冊、床の上には花粉を重たげに芍薬が香つてゐた。松原町と云つても市の北郊だけにガラス窓を通して見ると生垣の外はすぐ麥畑がつゞいて黄昏の光がたゞよつて向ふの民家にはもう黄色い燈がボツボツ光つてゐる。フト廊下に三四人の聲音が聞えた。笑ひなら此方へ來てゐるらしい途端戸が開いて定子さんの人おちせぬ姿が現はれた。

「お待たせしてごめんなさいネ今日お友達二人しかいらつしやらなかつたわ。四人に案内狀出したんだけど。數子さん夏江さん、入つてこない」

「エエ、オホホ」と流石に二人は外に立往生してゐた。無理に引きこんだ定子さんが紹介の役に立つた。

「こちら友枝夏江さん、早川數子さん、こちら春野さん、そちら美作さん」さう云つた時チラと美作を見た定子さんの瞳に打ちあつた彼はタジタジとして目をそらした。

「友枝さんはネ女學校のときバレーの首將、早川さんはピンボンの首將だつたのよ」

「いやよ、定子さん」と二人の女豪傑は赤くなつてにらんだ。

「お母さんはネむかうに追ひやつてあるからどんなにさわいだつて大丈夫よランプしませうか?」

「ランプなんて意味ないネ」と春野が叫んだ。

「ぢや、春野さん何にするの」

「電信遊び」

「マア」と數子さんと夏江さんが顔を見合せた。電信遊びは鬼をのぞいて皆手をつなぎ合つて互に信號し合つて鬼をた

ゝいていぢめる遊戲だつた。説明を聞いて美作も驚いて相當のものだなと春野を見ると春野は今日摘んだばかりの髪をテラテラに光らして澄ましてゐる。丁度席が春野の右が定子さんその右が美作だつたので春野の右手は定子さんの白い左手を握り定子さんの右手は美作の大きな黒い手に握られてゐた。

鬼となつた者は他の四人の表情、手の動きなどで發信者を見つけねばならないのだけれども皆膝の下にかくして隣者の手をじつとにぎりしめるのだから仲々分らなかつた。美作はおすく手を出して定子さんの右手を求めた。なまあたゝかいやわらかな手の感觸が傳つて来る。長い間握つてゐるとお互の手の間に汗が出て美作はそれを氣にしてズボンにこすりつけこすりつけしてゐたが定子さんは澄まして居た。そして澄まして思はぬ發信を出しては鬼を迷はせて口惜しがらせた。

丁度鬼は數子さんだつた。定子さんの白い手を一方づゝ握つた春野と美作はもうお互に完全にライバル同志であることを覺つて意地になつて定子さんの手がどちらを握りしめるかを無言のうちに争つた。

「可笑しいわ、誰も發信しないのネオホ……」と定子さんが頭を伏せて笑つた。美作の目の前に紫の銘仙か何かに華手な帯をした定子さんの体が疊の上に頭をつけて

「早く誰か出してよ」と叫んでゐる。白い襟足がするどい刺戟をあたへる。

他の二人の女たちも主人公がつつ伏してしまつたので仕方なくたゞオホ……と笑つてしまふ。男たちもつりこまれてアハハ……と笑つた。しかし男たちの心の中は全く之と反對だつた。美作は華やかな定子さんの姿愛嬌のある二人の少女たち、この賑やかな雰圍氣の中にありながら苦しい重々しい數秒をすごさねばならなかつた。どちらに定子さんは發信するだらう。そしてその發信はこの場合決定的なものではないだらうか。……そう考へると美作は堪へがたい恐怖を感じる今にもこの美作の手がじつと握りしめられる様な氣もする一方には春野がその嬉を得る時の有様も想像され

る。そんな場合には美作が數年來懷き來つた片思ひは完全にやぶられるのだ。そしてその解決は數秒内にせまつてゐる。胸がはづんで來たので春野の方をふりむくと彼も緊張してゐるらしいぐつと眉根をよせて一點を凝視してゐる春野はいつも教室などで話す氣のおけぬ春野とは全くちがつた眞面目な顔に變つてゐる。

そして春野の凜々しい形に壓倒された美作は逆にこちらから發信しやうかとも考へた。

「まだ出さないの、きつと電線に故障が出たのよオホホ……」定子さんがまだ頭を疊につけて皆を又笑はせた。しかし男たちは矢張り心の中に無言の競争をつづけた。定子さんの右手は美作の左手の中にあつたけれども動く氣配はなかつた。せめてこのまゝどちらにも發信してくれなければよいと思つた瞬間春野の顔がサツと輝いて勝誇つた様に美作をふりかへると悠々と左手をあげて鬼の數子さんをイヤと云ふ程どやしつけてワハハ……と笑つた。

「アラ定子さんなの」定子さんは赤くなつてまたうつぶしになつたまゝうなづいた。

その次美作は右の夏江さんの右の手の壓迫をうけて鬼の定子さんをもう元氣なくなつてゐた。

「もつと、叩いてやらなきや駄目だぞ」と春野が笑つた。

「春野さんだわネ」と定子が大きく目をめひらいてにらんだ。

「否」

「ぢやだれ、美作さん？……おや數子さんだつたの、隅におけないわ」

しかしこんな場合は稀で美作と定子さん特に春野だけが發信してゐたのですぐ發信者は分るやうになつてゐた。美作は定子さんが彼と春野とどちらをうんと叩くかと云ふ事まで研究して見た。

「も一人男子が居ないと夏江さんと數子さんの間が寂しい様だね」と春野が云ひ出して電話で定子さんの從兄が傭はれたこの人も美作と同じ位の年頃だつた。

このエキストラを得て一座は急に賑はしくなつた。

「サイレントブレイをやらう」との従兄の提議で女たちは例の如く反對したけれどもお茶や菓子などを隅の方に押しやつて床の側に春野と定子さんの従兄が陣取つた。そしてそれに對する隅に美作と夏江さんと敷子さんが控えてゐる。

これはデエスチュアのみで敵の出したものとへば清正なら烏帽子とか槍とか虎とかでその清正たる事を味方に知らせもし味方に分らせる事が出来なかつたらその方の敗である。チャン拳で敗けて

「あまり難しいのは駄目だぜ」と春野がこのこと中央に進み出た。味方の二人と相談して美作は「チンドン屋」と書いて渡した。

「なんだこんなもの、いゝですか定子さんと春野は先づ腹の前に大きな圓をかいて見せた。定子さんは熱心に彼の動作を見守つてうなづいた。そして旗を示し帽子を示して高く足をあげて手をふり二三回ぐる／＼とまはつた。

皆の顔の緊張がくづれて爆發した。

「マア、オホホ……………」

代つてこちらからは敷子さんが出た。一寸やせたピンボンの首將は春野が問題紙を出したのを受けとつて眞赤になつた。

「いやよ、こんなもの。だつて経験がないんだもの」と云ふのを皆で無理に責めると一寸何かの眞似をしたと思ふ恥ふかしいわと袂で顔を被つてしまつた。仕方がないから敗けた所で題目をきくと「嫉妬」だつたと云ふ、これは少々無理だ。

その他マネキンガール、ウエイトレスのやうな月並なものからギャングや匪賊のやうな凄いのまで種々飛び出して皆の腹をよじらせた。

特に春野の「金巴夜叉」や夏江さんの丹下左膳などは白眉でいつまでも笑が止らなかつた。しかしこの間美作は春野と定子さんのコンビが互に腫と腫を輝かせながらうなづき諒解し合つてゐるのを見ると羨望の念で一ぱいだつたそして數子さんがなし得なかつた嫉妬のサイレント・プレイを自分で行つてゐる自分を見出した。

時が立つにつれて美作はだん／＼心が銷沈してしまつて行くのを感じた。之に反して時が立つにつれて春野と定子さんは愉快になつて來た。彼らは興奮して他の人を無視した様にお互に手を取り背中をたゞきあつて嬉んだ。

「あら、こんなもの出して非道いわ。夏江さん、非道いわ、いゝわよ、あんたの時うんと苛めてあげるから覺えていらつしやいよ。」と定子さんは

出された紙をのぞきこみながら得意氣な表情をおしこらへてわざと口惜しそふな聲を出しながら衆目をあびて中央に立つた。

彼女のボツと上氣した顔には紅がさして興奮にふくらんだ形のよい鼻、濃い眉、眞赤な唇、春野の方にそゝがれて笑つてゐる腫、紫の派手な銘仙、それらが電燈の下に輝かしく浮び出た。そして微笑しながら、カールした髪、引眉、ルージュ、腕までのドレス、長いスガート、ハイヒールを順々に示してから鮮にふむ輕快なワルツのステップ。

「ダンサーですネ實際うまいなあ」男達は皆感嘆のあまり異口同音に叫んだ。

「適役ですネ」と美作も思はず賞めた。

「ぢや、今度は美作だな、お前にも適役をやるよ」と云つて春野が渡した紙を見た時美作はやられた！と思はざるを得なかつた。そこにはブルドックの五文字がグラ／＼と笑つてゐた。苦笑しながらなるべく定子さんに見えない様に努力して四ノ這になつて顔を妙な風にしかめて尾をふつたり足をあげたり苦心慘膽せねばならなかつた。

「駄目よ美作さん。こちらにも見える様にせなくちゃ卑怯ぢやないの」と定子さんが容赦なく辛辣に言つた。

「ネ、早川さん、もう分つたでせう、友枝さん、分つたなら云つて下さい」と美作は汗まで出してゐたがこの數子さんと夏江さんにはまだ分りかねた。そして嘖き出しながら、笑つてゐるのが美作には癪にさわつた。

「蛙ですの」と夏江さんが漸く小聲で云つた。

「情ないなあ、尻ツボがあるんですよ」

「ぢや私よく見てゐるからもう一返やつてごらんなさい」

しかし美作は定子さんの目が眩ゆく輝いてゐる中に二度とブルドックの醜い顔をくりかへす勇氣はなかつた。

「美作、も一返やれよ」美作さん、初からやつてごらんなさい」と方々から浴せられて彼は尙座敷の眞中に四ん這になつたまゝで居る。そしてガラス障子にうつてゐる自己の醜い姿に全く嫌氣が差して來た。

そして彼の頭に浮ぶものは三四年前のあの自轉車顛覆の時の醜い彼の姿だつた。またあの失敗を繰りかへしてゐると思ふと彼の姿に笑ひ興じてゐる人々の存在さへ呪はしくなつて來るのだつた。

「おい。あんまりなぶるなよ……」と彼は馬鹿のやうに意味もなく笑ひながら助けを求めた。

「オホホ……美作さん。そつくりよ」と定子さんは春野の肩をたたくきながらよろこんだ。

「美作、ブルドックの方から似てゐるぞ。實際見ちやおられんネ」

と春野は床柱にもたれながらだんだん傲然となりながら嘲弄した。美作はもう明に春野に一種の敵愾心をいだいた。そしてエチオピア人とか河馬とかさせて春野を困らせやうとしたが美男で愛嬌ある春野がすると妙にユーモラスに見えるて皆の喝采の的となつた。

美作が元氣がなくなつて行つたので賑だつた一座もだん／＼白けて行つた。

「何時？」

「まだ九時位だらう」と春野が時計を見ると短針が11をこえて12に迫まつて居た。

「あら、もう十一時半すぎよ、もう失禮するわ」

「もう、そんなにあるの？」

と皆あわてゝ歸り仕度をはじめた。

行きがけとは全く異つた重い足取で美作が家に歸りついたのは十二時過ぎてゐた。

暗い電燈の下に照らし出されてゐる汚れた疊、粗末な家具、舊式な柱時計だけが佻しく音をきざんでゐる。パタリと帽子を投げ出してどかりと腰を下した。天井を凝視する彼の眼に映るものは定子さんの興奮で紅の顔、笑つて春野と叫きあつてゐる黒い瞳、その視線の先に傲然と座つてゐる常に朗らかな常に輝かしい春野。そしてその前に惨めにも満座の嘲笑を浴びながら四ッ這になつた彼の醜惡なブルドック。……長年美作が寂寥たる心の中の唯一のオアシスとして又唯一の偶像として守りつゞけた定子さんの姿は今日春野の手により踏みにぢられ奪はれた！中學の時から先輩や同級の輕薄なラブ・ハンターを後目に見て一すじに學び、くそ眞面目、馬鹿正直と惡口されてたまらない程寂しくなる時美作がいつもその苦をなぐさめて呉れるのは空想上の定子さんだつた。そして今度は他人の情事を聞かされた時とか又青年に特有の惱ましい衝動がおこつた時の唯一無二の治療藥は定子さんの姿だつた。そして勇氣がなくて打ち明け得ぬと云ふよりはむしろ片思ひの状態に満足してゐたのだつたけれども今その定子さんは偶像の地位から春野の愛人へと進化したのだ。それは無理もない當然の事だけれども美作は恰も定子さんが自分を無視して情夫でも造つたかのやうに感じ春野には嫉妬、憎惡と共に理由のない憤怒まで懷くのだつた。

そして今まで至上のものとしてゐた自分の學校での又その他のすべての名譽は塵埃にもひとしく無價値なものに思

はれた。無爲にして終つた青春、そして今や將に今までのロマンティックな空想時代を脱却すべき時は既に背後にせまつてゐるのを覺え後悔と焦燥におそはれた。隣の室では老人が軽い鼾を立てゝゐる。日課たる夕刊讀みを分りもせぬ經濟市況にまで目を通すほど徒然のこの老人が時々溜息に似た深い呼吸をするその度に美作は汚れた蒲團の上に屍のやうに横はる貧弱な老人の姿を想起せずにはおられない。小さい頭小さい体小さい手足そしてそれらにも増して小さい彼の神經。命より大切とした職から追はれて今はたゞ息子の成長のみを楽しみにしてゐる疲れはてた人。父そのまゝの貧弱な能力しか持たぬ子供を日本一の頭腦の持主の如く誇りその出世をまつ人。しかしその夢も子供が今日味つた幻滅のやうにいつかは消え去る事だらう。美作は自分もこの老人のやうに若い戀もなく感激もない青春時代が過ぎてやがてうすぐらい或事務所の牢獄のやうな室に三十何年もつとめよ／＼になつてしまつた自分の姿を思ひうかべる事が出来るやうな氣がした。

氣拔けた様に立ち上ると父の傍の蒲團に潜りこんだ冷い感觸が身に迫る。

しかし次の瞬間彼は春野の寝姿を思つて一時に血が逆流し身は赫ともえる様に感じた。

あの歸らうとした時の事だつた。

金縁ノガネをかけた定子さんのお母さんが出て來られて春野に狎れ／＼しく、

「おや、春野さん、もうおかへりですの。もう今日は遅いから泊つてお出でなさいよ、ネ學校だつていゝでせう。こゝからあなたの所まですぐですもの。ネ、遠慮するのは似合ませんよ」と云はれて到頭春野は友達甲斐もなく宿る事になつた。今頃は春野はどの室でどうして寝てゐるだらう。

「勇、歸つたネ面白かつたかい。どこで遊んでゐた？」

と氣配で覺めた父がやさしく尋ねた。

「春野の所です」とぶつきらばうに答へると細かい神経の所有者たる老人はすぐ息子の心を察したもののか「そりや、嚙面白かつたらう。春野と云ふ男は大層眞面目のやうだな、あんな男はきつと出世するぞ。大体態度がいゝな……」

と一人でしゃべりつづけた。

美作は當然不快を催すべき此語も軽く聞きながして彼の頭腦の全力は春野にかゝつてゐた。宿つた春野は客間に寝せられるだらうか。又は座敷たらうか。又は定子さんの離れだらうかとまで非常識にも考へた。そして考へがそこまで達すると美作は甘い興奮の中にひよいとふいむいて闇の中に華やかな二人の寝姿を求めやうとしたが、そこには相手にされずに又すゝと眠る老人の瘦せた顔の輪廓がさびしくほの見えるだけだつた。

時計がチンと一時を告げた後は何も聞えなかつた。たゞひつそり更けた夜空に遠くで蛙が鳴いてゐるのがしんと響いてゐる。

——(完)——